

徳島県産国会議事堂大理石の研究

-その2. 採掘関連聞き取り調査と検証-

石田啓祐^a・中尾賢一^b・東明省三^c

^a 徳島大学総合科学部地球物質科学教室, 〒770-8502 徳島市南常三島町1-1,
ishidak@ias.tokushima-u.ac.jp

^b 徳島県立博物館, 〒770-8070 徳島市八万町向寺山文化の森総合公園

^c 〒779-1402 阿南市桑野町中野145-1

Marbles from Tokushima Prefecture, decorating the National Diet Building

-Part 2: hearing data of the quarrying and their verification-

Keisuke ISHIDA^a, Ken-ichi NAKAO^b and Shozo SHINOAKI^c

^a Laboratory of Geology, Faculty of Integrated Arts and Sciences, University of Tokushima, 1-1
Minamijosanjima, Tokushima 770-8502, Japan. ishidak@ias.tokushima-u.ac.jp

^b Tokushima Prefectural Museum, Bunka-no-mori Park, Tokushima 770-8070, Japan

^c 145-1 Nakano, Kuwano-cho, Anan, Tokushima 779-1402, Japan

Abstract

The hearing data were documented about the quarrying of marbles in Tokushima Prefecture for the construction of the National Diet Building (Nagata-cho, Chiyodaku, Tokyo). The seven marble brands, “Akebono”, “Kito-ishi”, “Hototogisu”, “Kamo-sarasa”, “Awayuki”, “Kotajima” and “Shin-awayuki”, which decorate the inner wall of the building, were quarried in Kisawa and Anan areas from late Taisho to early Showa period (1919-1935). The hearing has been carried out during 2004 – 2007 (mainly 2004 – 2005) in Tokushima Prefecture, and at Yabashi Marble Company Ltd. in Akasaka, Gifu Prefecture, as well as related research of quarries and marbles in the Diet Building, for the verification of hearing data.

Keywords: National Diet Building, marble, pelagic limestone, Tokushima Prefecture

1. はじめに

国会議事堂（東京都千代田区永田町，1920<大正9>年起工，1936<昭和11>年落成）の建築には，徳島県産の大理石（石灰岩）が，内装の要所に多数使用されている。建設計画から110余年，石材調査完了から90年，竣工から70年近く経た今日，国会議事堂建築に当たっての石材切り出しの経緯と現地を確認し，正確な記録を将来に留めることは，国会議事堂の建設を石材の面から一層明らかにすることであり，代表的石材産地のひとつである徳島県においては，重要な調査・研究課題である。

国会議事堂の石材に関しては，小山（1931），大蔵省営繕管財局（1936，1938），工藤ほか

（1999）などの報告があるが，徳島県産の石材採掘場所は，文献によって一部に差異があり，詳細な点で不明な部分があった。筆者らは，地域貢献支援の一環として，国会議事堂建築に使用された徳島県産石材の学術・文化的意義を探求し，これまで不詳とされてきた県産石材の調査を推進する目的で，収集資料や，聞き取り調査から採掘場所を特定し，現地で採集・整形した石材を議事堂に持ち込み照合する作業を進めてきた（石田ほか，2004）。これまでに国会議事堂で調査を行ったのは中央階段を含めた衆参両院である（2004年1月，2005年3月，2006年1月）。また矢橋大理石（株）と憲政記念館に保管されている石材標本との照合を行った（2004年1月，2004年3月）。これらと並行して，採

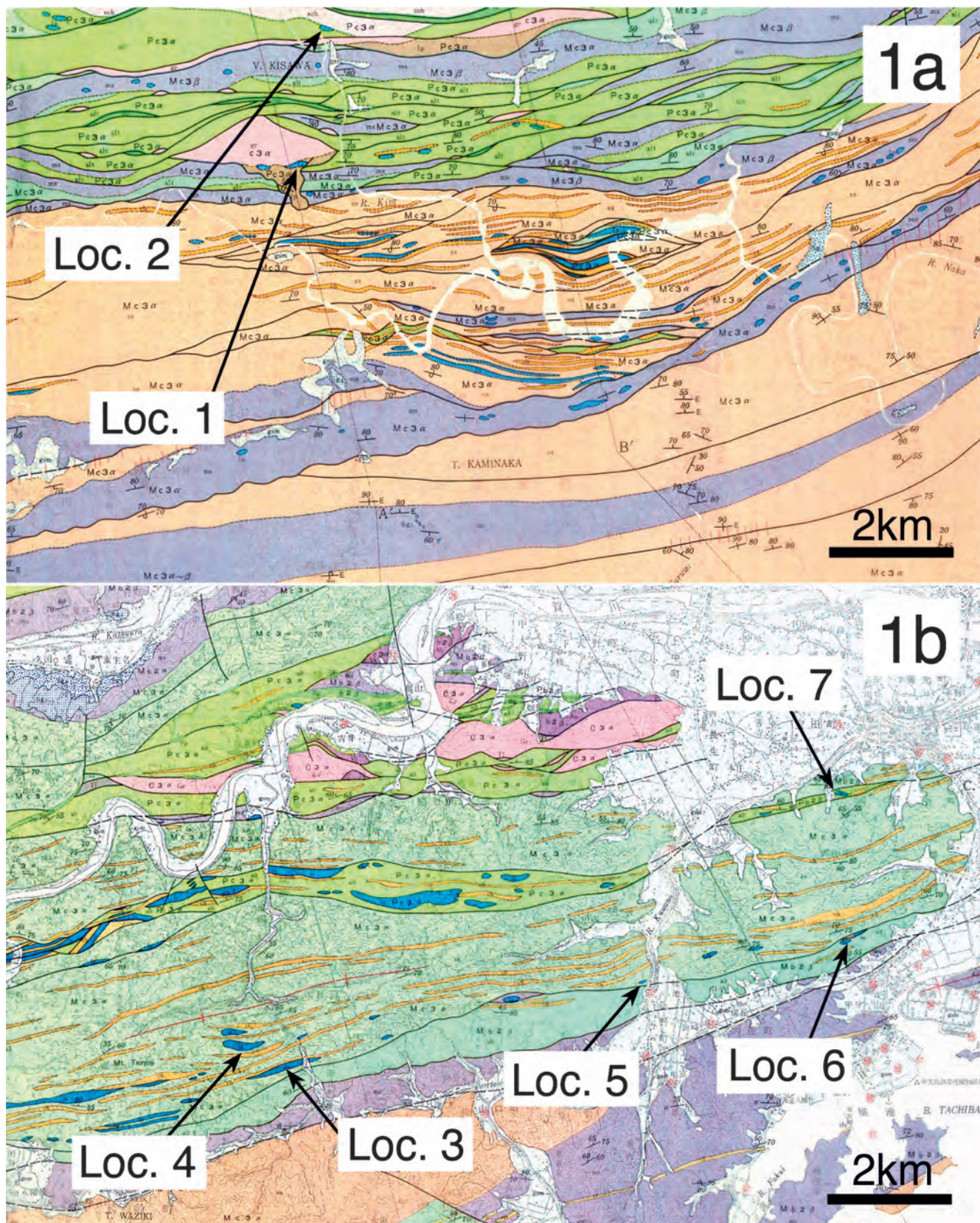


図1. 徳島県産国会議事堂大理石産出地点 (石田ほか, 2004).
1a: 5万分の1表層地質図「桜谷」(中川他, 1980)の一部に加筆; 1b: 5万分の1表層地質図「阿波富岡」(中川他, 1979)の一部に加筆.

掘場の地質学的な位置づけや、石材の地質年代に関する調査を進めている。先の報告（石田ほか，2004）では、これまでに明らかとなった採掘場とその地質学的位置づけ，ならびに石材の地質年代の概要に関して報告した。今回の報告では，全7種の石材銘柄について，それぞれの採掘に関する情報を，聞き取り調査の結果と採石跡地の状況を中心に，野外調査や試料調査から検証し報告する。

2. 石材と採掘

国会議事堂の内装に使用されている国内各地の大理石は33～37銘柄に及び，中には現在の韓半島や台湾の石材も含まれるが，その使用量は徳島県産の大理石（石灰岩）が最も多いと言われている（工藤ほか，1999）。その中で，徳島県産は「曙」，「木頭石」，「時鳥（ほととぎす）」，「淡雪」，「加茂更紗」，「答島」，「新淡雪」の7銘柄である（図1）。これらの産地のうち，阿南市内の5箇所および那賀町（旧木沢村域）2箇所について現地調査と採掘関連の聞き取り調査を行った。その結果，すべての銘柄の採掘を終了していることが明らかになった。

2.1. 「曙」

産地：那賀町（旧木沢村）坂州高山平（図1：Loc. 1）。

岩質：部分的に赤みがかった灰白色で，方解石脈の多いやや結晶質石灰岩。多少とも角礫状で，基質はほとんどなく，境界部にはスタイロライト構造が顕著に見られる。クサリサンゴ，ハチノスサンゴなどを含む。「曙」の下位（北側）に位置し，灰色・淡灰色・淡紅色の石灰岩角礫からなり，礫境界の暗緑色凝灰質フィルムや基質が多いものは「四紋」（しもん）と呼ばれ，「曙」の採取のために採掘されたが，良質ではなく，議事堂石材には使用されていない。

地質：石田（1977）が報告した黒瀬川構造帯日明山レンズ状部のシルル紀石灰岩体が採掘されている（図2下）。

採掘跡の露頭状況：日明山東斜面の急崖を登り詰めた標高850～870mの地点に位置する（図2上）。

議事堂での使用場所：衆参両院第二議員階段の手すり・壁，各政党控室のヒーターの天板。

聞き取り情報：神原博氏（元採石技術者，阿南市阿瀬比町中村，1910<明治43>年7月生）の談によれば，坂州木頭村（現那賀町）高山の採掘現場まで坂州の役場からは1里。当時，採掘のため坂州橋を渡って少し行った所に寝泊まりしていた。神原氏が17歳から20歳までの頃（大正末から昭和初期）のことである。神原氏は，それ以前に高等小学校を卒業後，叔父の田中賀平氏（阿瀬比町西内，田中竹次氏の養父）の下で採石作業に携わり，採掘の技術を伝授されたという。（賀平氏は，山口町平野19の折原家から田中家の養子となったが，神原氏の母は，賀

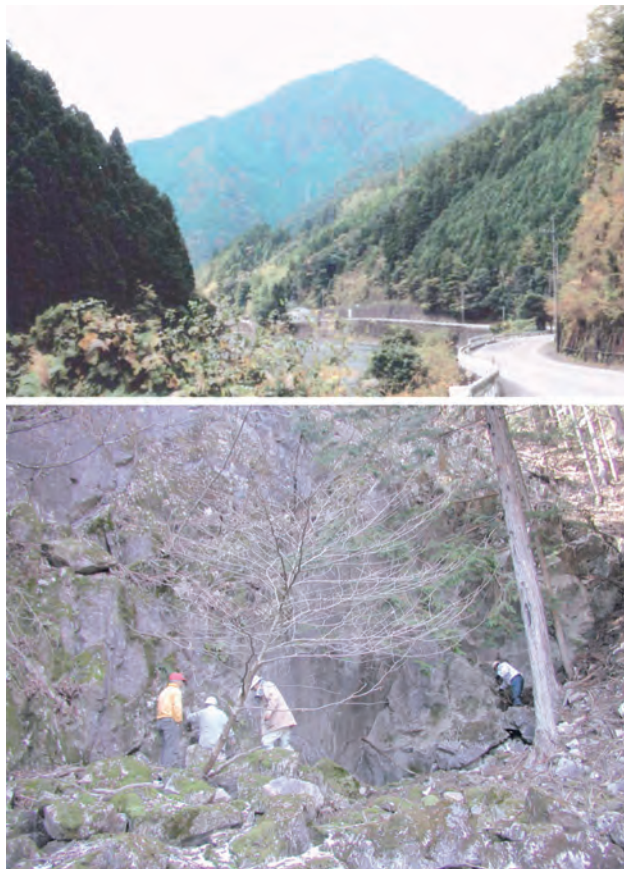


図2. 日明山（上）と「曙」採掘跡（下）。

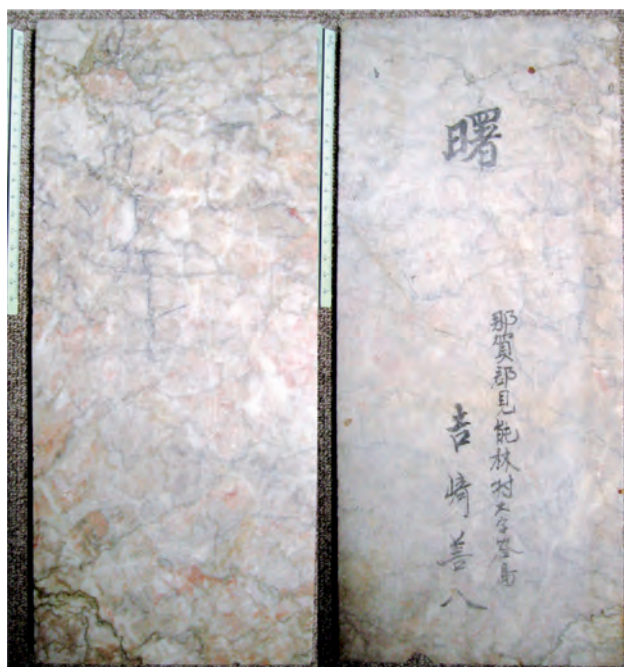


図3. 吉崎家に伝世した「曙」製の花台. 表（左）裏面（右）には，「曙」の石材名と共に，吉崎善八氏の名前と住所が，那賀郡見能林村大字答島と墨書されている。（吉崎建材店，阿南市見能林町堤ノ内，吉崎義人氏より徳島大学に寄贈）。



図4. 田中家所蔵の「曙」製の花台（田中滋子氏蔵，阿南市阿瀬比町西内）.



図7. 矢橋大理石（岐阜県大垣市）所蔵の「曙」石材見本.



図5. 「曙」切り出し当時の写真（木沢村誌編纂室蔵）. 1927-30（昭和2-5）年頃.



図6. 「曙」採掘場直下のくず石と堰堤.



図8. 「曙」を加工した花器（神原 博氏作・蔵）.

平氏のすぐ上の実姉、折原家から新野町海老川の神原家へ嫁いだ。)高山平の大理石鉱床の発見者は阿南市の吉崎善八氏であり(図3),田中氏が権利を買い取った(図4)。採掘現場で働いていたのは20人くらい。神原氏は、朝4時に起きて8升の米を炊き、おかずをつくっていた。うずら豆・高野豆腐などをよく使ったという。火薬は黒色火薬を使用。石は注文に応じて5・4・3尺といろいろな長さに切り出していた(図5)。地元の人から火薬の使用を反対する声が強く、後半は1尺5寸の長さの箭を使って切り出した。神原氏は現場の採石技術者として、箭の使い方に習熟していたため、高知県内の採石業者に請われて、箭の使い方を教えにいったこともある。また、くず石の捨て場所に苦労した。石垣を積んで、その上に捨てるようにした(図6)。この作業は、石垣積み長に長じていた田中安平氏(賀平氏の義父)が、地元の人々を補助員に雇い、作業をしていた。山も木馬道も急坂が多く、木馬は4人がかりで7尺の前棒で柁を取り、慎重に下ろしていた。木馬へ石を積むのに、現場では手回しのウインチを使っていた。坂州橋の南側、木馬道の終点でトロッコに石を載せる時も、ウインチを使い、当時は吊り橋だった坂州橋の上を、工夫をして慎重に、かつ勢いよく一気に渡っていた。県道へ出てからは、トラックで桑野または赤松・日和佐経由で橋港から大阪へ積み出して、岐阜へ送っていた。桑野までの間では、当時の仁宇橋が、いわゆる舟橋で舟を多く並べて、その上に架けた橋で荷重4トンと制限されていたので、重い場合は赤松回りとなっていた。岐阜(矢橋大理石)との行き来は頻繁で、神原氏も何度か出かけたことがある(図7)。「曙」は国会議事堂の内装石材に重用されたが、付随して産出する「四紋」はあまり歓迎されなかった。「四紋」は出荷品の2~3割を占めた。神原氏の作による「曙」の加工品には、フアボシテスやハリシテスの化石が含まれているのが確認された(図8)。神原氏は、1931(昭和6)年1月、21歳のとき、海軍に入隊した。3年間の兵役を終えてからは阿瀬比の現場で働き、25歳で結婚した。坂州木頭村の現場は、1934(昭和9)年9月20~21日の室戸台風で、十二社近くの県道が大きく崩れ、早急な復旧が見込めず閉山した。

2.2. 「木頭石」

産地：那賀町(旧木沢村)木頭みさご山(図1：Loc. 2)。

岩質：石灰岩の碎屑物と海底火山噴出物からなる重力流堆積物で、赤色層状チャートと灰白色の遠洋性石灰岩の互層に挟在する(図9)。碎屑性石灰岩は石炭紀後期のコノドントやサンゴ片を含む。岩質は多様で、細粒部分は、暗灰~白色のクラストからなり、緑色の凝灰質フィルムを縞状や網目状に含むほか、ウミユリの暗色細片を斑状に含む。粗粒部は赤紫色のハイアロクラスト基質に、長径数10cm以下の玄武岩塊

や石灰岩塊を含む。赤色の層状チャートからは石炭紀後期後半のコノドントが産する。

地質：黒瀬川帯北部(正木帯：石田・香西，2003)の緑色岩分布地帯に由来する。

議事堂での使用場所：衆参両院副議長応接室の暖炉に使用。

聞き取り情報：神原博氏の談によれば、吉崎氏が経営。採掘場所は黒滝寺へ上がる道路の途中から右へ分岐し登っていく道沿い(図10)。頂上に近い所で、山が急傾斜なため採掘・運搬と



図9. 「木頭石」石灰角礫岩部に見られる重力流堆積物の級化と逆級化。採掘跡直下の大美谷。



図10. 「木頭石」採掘跡。那賀町(旧木沢村)大美谷口より撮影。



図 11. 「時鳥」採掘跡、阿瀬比国道南よりの遠景。尾根左上部の古い採掘跡より採掘された。



図 12. 「時鳥」採掘跡の切り割り。

もに困難で、苦勞して採掘しても石材を置くためのやや広いスペース、木馬に積み込むために必要な平らな土地さえもない急傾斜で狭い土地が災いして、短期間の操業に終わった。

2.3. 「時鳥」

産地：阿南市阿瀬比町亜利田（図 1 : Loc. 3）。

岩質：淡灰色(2.5Y7/1)ミクライト（石灰泥）質で、部分的にイントラクラスト（同質の炭酸塩碎屑物）を含み、基質は淡黄色(2.5Y8/4)ドロマイト質である。

地質：三疊紀後期ノリアン後半のコノドントを産するチャート/石灰岩互層部の上位から採掘。互層部の下位側には、赤紫色凝灰岩基質の石灰角礫岩を挟んで、生痕の多いミクライト質石灰岩(茶竜紋)が位置し、下底は四万十北帯のアプチアン期の放散虫を含む泥質タービダイト互層(榎谷層)に衝上している。那賀川帯津乃峰亜帯の白亜紀初期付加体メラングジュ相に属する石灰岩体。採掘跡の露頭状況：露頭は国道 195 号沿いの阿瀬比の集落から望むことができる（図 11）。現



図 13. 議事堂の天皇御休所正面額縁に使用された「時鳥」。彫刻の施された柱と額縁は一枚岩で構成される。



図 14. 「時鳥」採掘跡北壁に残る節理のない一枚岩。



図 15. 「時鳥」の一枚岩運搬に使われた 5 頭立て馬車の車輪金具。阿瀬比，田中家所蔵。

現地へは県道阿瀬比—加茂線から廃道（現存する当時の搬出路）を辿って約 1.5 km（標高差約 180m）で、上半分は、道幅が広く傾斜のゆるやかな道が残っており、比較的容易に当時の現場まで歩いていける。採掘していた現場の露頭は、南向きで東西約 200m、高さ 40～60m で、大きな石材が多く放置されている（図 12）。議事堂において御休所正面の額縁に使用されている「時鳥」の一枚岩（図 13）は、阿瀬比の採掘跡において、節理の見られない岩盤の露出する北壁中央部付近から採掘されたものと推測される（図 14）。

議事堂での使用場所：御休所入口の額縁（門柱・梁：図 13）、中央階段左右の壁など。
聞き取り情報：神原 博氏の談によれば、田中賀平氏の後、その後、嗣子（後に分家）の田中竹次氏が経営を継ぎ、阿瀬比町阿利田で、大正の始め頃から大理石を採掘し、1 か月に千切（1 切は 1 尺立方）ほど生産していた。国会議事堂に使われた後も、採石していた。阪神百貨店・三越百貨店（東京）に使われている。坑口が 3 か所あり、2 号口は淡雪、3 号口は時鳥（ほととぎす）、後に「茶竜紋」（商品名変更か）を掘っていた。第二次大戦終戦頃から箭が長くなり、1 丈 5 尺の錐を着けた削岩機を使うようになった。ほかに「金砂」・「昇竜」という大理石も出していた。第二次大戦中は大理石の需要が止まり、代わって、製鉄用の石灰石の採掘を軍当局などから要請された。くず石は、早くから中山製鋼に売却していた。ここでは、1960（昭和 35）年頃まで採石していた。

その後の阿瀬比における採掘は、田中一成氏（田中竹次氏の長男）・田中滋子氏（賀平氏の子）の談によれば、現在まで採掘しているのが阿瀬比町阿利田の鉱床で、「時鳥」を産出した場所から北側へ尾根一つ越した鉱床である。昭和初期から田中竹次氏・一成氏が 1998（平成 10）年頃まで、大理石（「淡雪」）を採掘するとともに碎石の生産などをしていたが、大理石が採れなく



図 16. 「時鳥」で作られた花器。田中滋子氏蔵。

なり、2003（平成 15）年から広瀬氏（鷲敷町、社名ヒロックス）が石灰石を採掘して碎石を作っている。

「阿南市史 第三卷（近代編）」（阿南市史編さん委員会編，2001）編纂に当たったの取材記録「6. 大理石ほととぎす。採掘当時を語る。」（阿南市史編さん室所蔵，1989<平成元年>8月，B4，1p.）によれば、磯田篤一氏（「時鳥」採掘当時の現場監督，阿南市阿瀬比町）は、「当時の技術よりみて無理と思われる程大きいものを切り出し、運搬に困り 5 頭立ての馬車を作り、牟岐線桑野駅まで搬出しました。」と語っている。阿瀬比の田中家には、現在もその運搬に使われた 5 頭立ての馬車の車輪の金具が残されている（田中滋子氏談，図 15）。その他、田中家では、「時鳥」を加工した花器も作成された（図 16）。

2.4. 「淡雪」

産地：阿南市加茂町黒河（くろご；図 1：Loc. 4；図 17）。

岩質：淡灰色（10YR6/2）ミクライト質で、白色の方解石を脈状や綿雲状に含む（図 18）。石材により黒色のスタイロライト境界が見られる。議事堂の石材は、六射サンゴの密集する黒色石灰岩塊とメガロドンを含む。

地質：津乃峰亜帯メランジュ相の上部三疊系石灰岩体。

議事堂での使用場所：衆参両院議場回りと御休所前通路の幅木に使用。

聞き取り情報：神原 博氏の談によれば、竜の窟（いわや）の上の方で採掘が始まったのは、「時鳥」の採掘より少し遅れてからで、「加茂更紗」

（ただし同氏の言う「加茂更紗」については、矢橋大理石で折戸氏、長谷川氏とともに、石材見本を照合し、淡雪であることを確認した。石田ほか，2004：「加茂更紗」と「淡雪」に関する考証を参照）を出していた。加藤清尋氏（株式会社ヒロックス太龍鉱山事務所長）の談によれば、旧太龍石灰鉱山採石場から南に延びる尾根の西側斜面で採掘を開始し（図 17 上）、その後、同じ岩体を尾根の東側斜面（図 17 下）で大規模



図 17. 「淡雪」採掘跡. 上:尾根西側斜面の採掘跡. 手前のヒロックス採掘場ではなく, 中央の谷上部に見える岩体. 下:尾根東側斜面の採掘跡.

に採掘した. 阿瀬比の田中家に保存されていた石材出荷当時の記念写真(図 19)は, 状況から, 西側斜面での「淡雪」の採掘の極めて初期の段階の撮影と推測される.

2.5. 「加茂更紗」

産地: 阿南市桑野町大地 (図 1 : Loc. 5).

岩質: 長径数~10cm の淡灰色ミクライト質イントラクラストの境界は網目状の緑色凝灰岩フィ

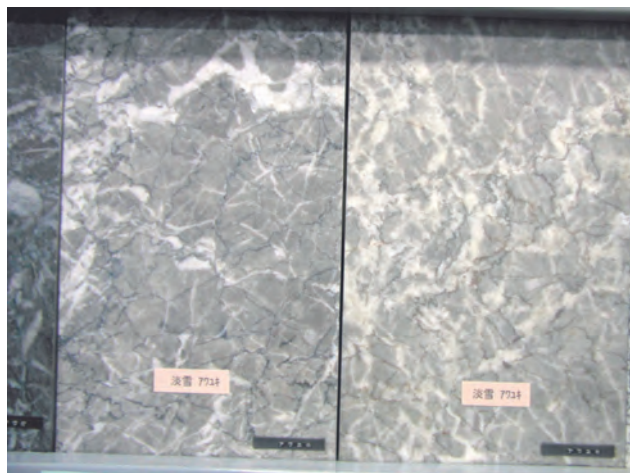


図 18. 矢橋大理石の「淡雪」石材見本.



図 19. 田中家に所蔵されていた石材出荷記念写真(田中滋子氏蔵). 高札に「田中大理石採石場」の文字が見える. 1919-20 (大正 8-9) 年頃.

ルムからなる(図 22). まれに六射サンゴや赤色チャート岩片を含む.

地質: 採石場の石灰岩からは三疊紀後期ノリアンおよびレチアンのコノドントが産する. 南側に隣接する泥質岩からは白亜紀初期の放射虫群集が検出された. 津乃峰亜帯のメラングジュ相に属する石灰岩体である.

採掘跡の露頭状況: 県道から 300m (うち坂道は 200m 足らず, 標高差約 25m) と, 現地へ行くのは, かつての木馬道が残っていて容易である. 露頭は東向きで南北幅 16m, 東西奥行 8m ほどで, 採掘当時に比べて, 露頭の下部が土砂でかなり埋積されている. また木馬道の一部は斜面の切り割りで構成される. 松浦康雄氏(阿南市桑野町大地)ならびに早瀬隆人氏(松浦菊蔵氏の孫, 当時小学校)の談によれば, 積み出し場の石垣の高さは, 積み出し用のトラック車両(当時はオート三輪が主であった)の荷台の高さと幅に合わせて作られており, その状態が現存している(図 20 上). 採掘露頭にはサンゴの密集部が挟在する. 採石場に至る切り割りの



図 20. 「加茂更紗」採掘跡（上）および入口にある積み出し場跡の石組み（下）。



図 21. 「加茂更紗」を用いた「帝国議事堂落成記念」碑と折戸嗣夫氏（左）。碑文の拡大（右）。岐阜県大垣市赤坂の矢橋大理石敷地内。

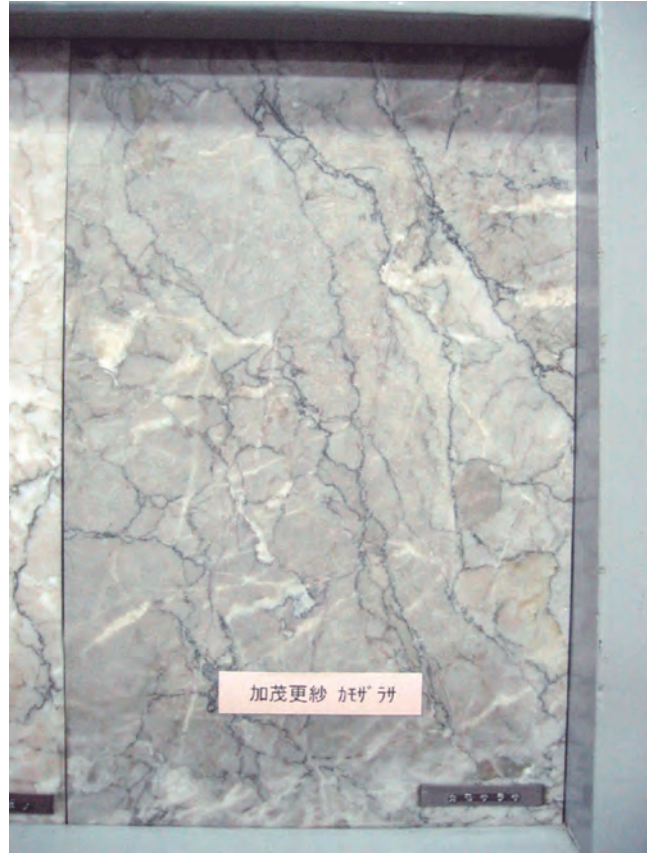


図 22. 矢橋大理石の「加茂更紗」石材見本。

南（左）側には、付近のチャート岩体に胚胎するマンガン鉱石の採掘岩塊が散在する。鈴江家に隣接して、石材を運んだ切り通しが長くまっすぐに残っている。側壁に石垣を積んだ丁寧な造りである（図 20 下）。

議事堂での使用場所：中央玄関内側の壁に使用されている。また大垣市赤坂の矢橋大理石敷地内には、加茂更紗を使用した議事堂落成記念の石碑が建立されている（図 21）ほか、石材見本が保存されている（図 22）。

聞き取り情報：山路義之氏（元採石業者、阿南市桑野町大地、1917<大正 6>年生）の談によれば、山路氏は、1930（昭和 5）年に長生町から現在の住所（松浦氏宅から 100m ほどの地点）に移り定住。その頃すでに、大地の松浦康雄氏の西側の山腹（比高で約 50m 上方）で、阿南市富岡町の吉崎氏が大理石を採掘していた（松浦氏談）。山路氏の父は、“もう少し早くここへ来ておれば、採石業に携わっていた私の父が鉱床を発見していたかもしれない”と、思いを語っていたようである。「加茂更紗」が採掘されたのは、1921（大正 14）年から 1938（昭和 13）年頃までで、麓から 300m 程の現場までは木馬道がつけられていた。作業は 10 人くらいが当たり、黒色火薬を使っていた。ダイナマイトは、強力過ぎて罅（ひび）が入るためである。採掘作業は、2 人の採掘技術者を中心にして、その指示にもとづいて作業する地元雇用の作業員で構成



図 23. 松浦家に保存された大地新口大理石日記帳と昭和6年日役帳表紙（松浦康雄氏蔵）。



図 24. 松浦家に保存された「加茂更紗」採掘場での記念写真。高札に「阿波大理石株式会社」の文字が見える（松浦康雄氏蔵）。

されていた。技術者は、たいてい県外から働きに来ており、社宅に住んでいた。大理石の採掘は、ふつうの石灰石の採掘に比べて、傷のない大きな石材を採取しなければならないという点で、はるかに高度な技術を要する作業であった。木馬で石を下ろす作業も危険な作業で、一つの木馬には3人が付いていた。下ろした石は、荷馬車で答島港まで、蛭地一内原の道路、重いときは中野を回って運んでいた神領の坂では、馬二頭で牽くことも多かったようである。また、見能林側は特に坂が急なためブレーキをかけたりするのに苦労した。ここから答島港まで2時間以上かかっていた。馬車が、誤って桑野川へ落ちたことも少なくなかった。採取する石材の大きさは注文に応じていろいろで、大きなものは畳一枚くらい、厚さは20~60cmでいろいろあった。最盛期の頃は短かったが、日本でも有数の石材だということの子供ながら認識してお

り、他郷に対するひそかな自慢でもあった。一方、一般向けの石灰石の採掘も盛んに行われていた。大地の堀川氏が1877(明治10)年から1907(明治40)年頃まで、山路氏の家の上の方で採掘していた。最初は、地面の上につき出している岩を掘っていたので、比較的少人数で作業も楽だったと思う。火薬はダイナマイトを使用していた。その後、山路氏と吉崎氏が共同で鉦区を買い取り、石灰を焼く窯を1つから3つに増やした。1935~1938(昭和10~13)年頃、小谷栄治氏宅西の山で、吉崎氏と共同で大理石を採掘したこともあったが、良質でなく量も少なく、やがて止めた。職人の給料は日給1円、上手な人は2円くらい取っていた。泥取りは50銭から60銭くらいだった。1960(昭和35)年廃業した直前には、被っている泥が20mもある深い所で掘っていた。台風で泥が崩れて、石灰石を厚く覆い、取り除けるのが難しくして事業を止めた。蛭地山では、山田宗次郎氏宅の上の方、頂上に近いところで常松増次氏、のちには吉見氏が石灰石を採って石灰を焼いていた。木馬道は、佐野トキエ氏宅の東側の谷から入っていた。

早淵隆人氏(徳島市八万町上福万)の談によれば、松浦康雄氏の父の菊蔵氏が大理石を採掘していた。「昭和6年 大地大理石 日役帳、吉寄桑野町」という帳簿、「大地新口 日記帳」という帳簿の2つがあった(図23)。また、「阿波大理石株式会社出張所」という法被を着た人たちが29人が写った記念写真もあった(図24)。かなり掘り進んでからの写真のように見受けられる。半間くらいの長さに切り出した石材が写っている。いつ頃から採掘を始めたかということとは不明。

鈴木保永氏(元桑野町蛭地の吉見石灰の現場で石灰石の採石に従事、阿南市桑野町大地、1924<大正13>年生)の談によれば、父親が「加茂更紗」の採掘に従事していた。大理石を採っていたのは1935(昭和10)年頃までで、多くの人数が作業していた。石材は、大きな轆轤や滑車を使って、真っすぐで急傾斜の切り通しを木馬で下ろしていた。麓からは馬車で答島港まで運んでいたが、重いので馬2頭で引っ張っていた。マンガンを掘っていたのは、1943~1947(昭和18~22)年の間で、鉄マンガン鉦が出ていた。戦時中は、大砲の砲身などをつくるマンガン鋼の原料として貴重だった。

2.6. 「答島」

産地：阿南市津乃峰町東分(図1: Loc. 6)。

岩質：議事堂の石材は、ホンクチと“答島2”の石材と同質で、部分的に白色方解石へと結晶化が進行した淡灰色ミクライトで、クモの巣状で黒色の破断劈開が1cm以下の間隔で発達する(図25)。

地質：“答島2”の石材からはノリアン前期のコノドントが産する。津乃峰垂帯の白亜紀初期メランジュ相に属する。黒岩の石材は、暗灰褐色の鳥巢式礁性石灰岩で、*Pantanellium lanceola*を伴うジュラ紀末-白亜紀初期の放散虫群集が産



図 25. 矢橋大理石の「答島」石材見本.

産する.

採掘跡の露頭状況：東分には、西からホンクチ，“答島 2”（仮称），黒岩の 3 つの採石場がある（図 26）. 現地へは，津峯神社参道から分かれて山道を 1 km 余りである. 3 箇所採掘跡地をはじめ，かつての木馬道や隧道も一部残っている. ただ現地は流土による埋積で，ホンクチでは，採掘当時の露頭の下半部が埋没している.

議事堂での使用場所：衆参両院記者階段の手すりと壁，3 階中央南と北の廊下の幅木など.

聞き取り情報：高島光彦氏（元阿南市小学校長，市内津乃峰町東分，1940<昭和 15>年生）の談によれば，答島は，旧見能林村の大字答島から採った石材の商品名. 採石をしていたのは，高島兵吉氏（光彦氏の祖父），毅氏（光彦氏の父）. もともと，兵吉氏は鳴門市高島に住み，塩田を持って塩を造っていた. 以前は，この付近（現在の津乃峰町長浜・新浜・西分・橘町幸野など）にも塩田があり，経営していたのが，こちらに来るようになった理由と思われる. 兵吉氏は県議会議員をしていたが，後に国会議員になり 2 期務めた. 兵吉氏の養子が毅氏である. 実際の採石業は主に毅氏を取り仕切っていた. 兵吉氏は塩田と政治活動で忙しかったと思われる. 石灰石を採っていたのは，東分 389（黒岩口，鉦区内でいちばん東）・404（真ん中，本口の東：本論で“答島 2”としている採掘跡）・405（本口：最も西）であった. 今も石灰石や大理石を下ろした切り通しが，山中に残っているのを 2



図 26. 「答島」採掘跡. 津乃峰山展望台から望むホンクチ（本口：斜面左影の切り割り）と橘湾の旧答島港.



図 27. 「答島」ホンクチ採掘場下の斜面に見られる石材切り通し跡.

カ所で確認した（図 27）.

増田肇氏（元教員，津乃峰町中分 20-1，1917 年生）によれば，増田氏が 12~13 歳頃（昭和 4~6 年頃）に大理石を搬出してはいた. 記憶としては石灰岩を出していた期間の方がずっと長い. 石灰岩は現場で小さく割り，二つの籠に積んで木馬で麓まで下ろして，石炭を



図 28. 高島家の石垣に宝珠文の刻まれた「答島」.

使って石灰窯で焼いていた。一方、トロッコで石を運んでいたこともあり、ときには、いたずらをしてトロッコに乗って遊んだこともあった。焼いた石灰（生石灰）は藁で編んだ吠（かます）に詰めて荷馬車に載せていた。港では海水をかけて消石灰にして、大阪の方へ送っていた。現場で表土を取り除ける人、石を割る人、吠を編む人、荷馬車で運ぶ人、港で荷役をする人など、碎石のダイナマイトを使う人などを除いては、ほとんど、地元の人たちが働いていた。鉱区内からは、方解石の大きな結晶が出たりして、鉱山が休みの日はよく拾いに行ったという。

高島家の石垣や庭石には切り出した当時の石材が多数用いられている（図 28）。

2.7. 「新淡雪」

産地：阿南市宝田町井関（図 1：Loc. 7）。

岩質：褐灰色（2.5Y5/3）ミクライト質で、空隙や幅 2～3mm の裂罅を充填した白色方解石脈が伴う。黒色に染まった破断劈開も見られる。

地質：秩父南帯（那賀川帯細野亜帯：石田・香西，2003）のジュラ紀後期付加体メランジュ相に属する石灰岩体である。少数ながら、有孔虫や石炭紀後期のコノドント *Idiognathodus delicatus* ほか産する（石田，1985）。

採掘跡の露頭状況：現在、岩体の北側まで隣地の造成が進んでいるが、「新淡雪」採掘跡はそのまま保存されている（図 29）。

議事堂での使用場所：中央広間床のモザイクの一部に使用。

聞き取り情報：板東英明氏（徳島県阿南土木事務所次長，阿南市宝田町井関在住）から、「淡雪」の採掘関係者についての情報を頂いたが、当時の採掘状況の詳細は現在も不詳である。吉崎義人氏（吉崎建材店取締役社長，阿南市見能林町堤ノ内）ならびに豊田 隆氏（同専務取締役）の談によれば、吉崎家が「新淡雪」の採掘・搬出に関わっている。

3. おわりに

筆者らは、地域貢献支援の一環として、国会議事堂建築に使用された徳島県産石材の学術・文化的意義を探求し、これまで不詳とされてきた県産石材の調査を推進する目的で、収集資料や、聞き取り調査から採掘場所を特定し、現地で採集・整形した石材を議事堂に持ち込み照合する作業を進めており、これらと並行して、採掘場の地質学的な位置づけや、石材の地質年代に関する調査を進めている。先の報告（石田ほか，2004）では、これまでに明らかとなった採掘場とその地質学的な位置づけ、ならびに石材の地質年代の概要に関して報告した。今回は、7種類の石材銘柄について、それぞれの採掘に関する情報を中心に、聞き取り調査の結果と、現地状況を検証しながら報告した。

これまでの石材調査から、議事堂は「大理石の博物館」といわれるくらい全国の有名な石材



図 29. 「新淡雪」採掘跡。上：採掘場上方より。下：採掘場西方より（新しい露頭部分は造成に伴い露出）。

が使われているが、その中でも徳島県産の石材は、以下の点で特徴があり、学術・文化的に意義のあるものであるといえる。

1. 議事堂の最も目に触れる主要な箇所にも多量に使用されている：議事堂正面玄関「加茂更紗」、中央階段「時鳥」、天皇御休所「時鳥」・「淡雪」、議員階段「曙」、議場周り「淡雪」、記者階段「答島」、中央広間モザイク「新淡雪」、衆参両院副議長応接室暖炉「木頭石」といった最も重要な場所に多量に使われている。

2. 採掘跡が当時の状況のまま現存する：議事堂に使用された 7 銘柄に関して、そのうちの必要な数才分の石材だけを切り出した「木頭石」の採掘跡は、表面がモルタルで覆われているが、それ以外の 6 箇所の採掘跡は、当時のまま残されている。とくに、「曙」「時鳥」採掘場は堰堤や木馬道の石垣ともに残っており、「加茂更紗」「答島」採掘場には、索道や切り通しが共に残されている。

3. 採掘当時の資料文書や写真、道具が残されている：議事堂石材の採掘は、それぞれに“晴れの仕事”であったことは、石材出荷当時の記

念写真が残されていることからわかる。また切り出しの道具、日役帳などが残されており、切り出し時期や場所を特定し、当時の切り出し状況を知る上で、採掘跡とともに、聞き取り情報を裏付ける貴重な資料となっている。これらの切り出し関連資料は、歴史や文化的な観点からも貴重な資料となるであろう。

4. 採掘岩体は小規模だが、希少で他にかけがえのないものである。採掘が行われた大理石は、いずれも石灰岩体としての規模が小さなものを手堀りしており、それぞれ特徴的で希少である。とくに那賀川流域には、地質学的には付加体メランジュ相に含まれる大きささまざまな石灰岩体があるが、議事堂に使用された大理石は、どれも年代や岩質が個性的であり、付加体の環境履歴やその起源となった海域古環境を特徴づける点のものであるといえ、他に代わるものがないかけがえのないものである。

5. 議事堂に使用されたことに加えて、石材そのものや含まれる化石が学術的に貴重である。例えば木沢の「曙」の場合は、西南日本最古級の化石を含む石灰岩体であり、地質学的には黒瀬川構造帯（市川ほか、1956）を特徴づける点で、徳島県下では唯一天然記念物に指定されている「立川のシルル紀石灰岩」（徳島県教育委員会編、1992）と同等の学術的に貴重なものである。しかも、工藤（1999）の記述にあるように、もし議事堂建築時に「曙」に含まれるサンゴ化石が発見されていれば、日本で最初のシルル紀化石の発見となっていたはずの岩体でもある。また「木頭石」は「曙」と同様に産出量が限られた希少なもので、しかも材質が特異で変化に富み装飾性が高い背景には、その成因が関与している。すなわち海底火山体を構成する玄武岩上に堆積した石灰岩の崩壊に由来する重力流堆積物が、海洋底に至る斜面深部の遠洋性の石灰質・珪質堆積物中に挟在したことを、研磨された石材の堆積構造が示していることである。

このように、徳島県産国会議事堂の大理石石材とその産地の調査研究は、自然科学とくに地質学的な観点からは、日本列島や四国山地の付加体形成と、その源となった古海洋の環境履歴を物語るものであり、探求する意義がある。同時に、冒頭でも述べたように、国会議事堂は当時の粋を集めた建築物であり、現在では、年間30万人以上の参観者が訪れるという、人々に親しまれた建築物でもある。したがって自然科学に留まらず、人文科学とくに、議事堂建築にあたっての石材採掘の歴史的経緯や、大理石石材の持つ芸術性とその文化的意義を含めた、文化財科学の観点から、総合的な探求と考察が望まれる意義の高い対象とテーマであると筆者らは捉えている。

補遺： その後の聞き取り調査で、石材切り出しの経緯に関わる以下の情報が得られたので、追記する。

田中賀平（1892-1952）氏が「田中大理石」を始めたのは、1920（大正9）年。大阪出身の梅

林行雲氏により設立されたばかりの「日本大理石」を買い取って発足した。梅林氏は、地元の素封家である内原町山下67の垣内氏や、桑野町大地200-2の堀内氏らから、資金の調達の協力が得られずに、田中氏に譲渡したといわれる。ちなみに、梅林行雲氏は、日支事変初めに話題になった、故梅林海軍中尉の父である。田中安平（田中賀平氏の義父）は阿瀬比町西内32-1の西内家から養子入籍。（以上、田中滋子氏の談による。）

田中竹次（1901～2001）氏は、阿瀬比町西内32-1の西内家から田中賀平氏の養子として入籍。後に、賀平氏42歳のときに、長女滋子氏が生まれたため分家し、桑野町中野139に移る。その後、桑野町鳥居前18-3に住み、1952（昭和27）年11月、賀平氏没後に、田中大理石を継ぐ。（以上、竹次氏長男の田中一成氏の談による。）

謝辞： 聞き取りに当たって、「新版 議事堂の石」の筆頭著者であり、長年、議事堂石材の調査と資料収集にあたられた工藤 晃 元衆議院議員からは、議事堂石材関連資料を提供頂いた。また、現地情報と資料情報の照合・確認に協力頂いたばかりでなく、調査研究の推進を常に暖かく励まして頂いた。共著者の大森昌衛 東京教育大学名誉教授、中井 均 都留文科大学教授ならびに、亀井節夫 元徳島県立博物館長からは、温かい励ましのお言葉をいただいた。

国会議事堂の石材視察調査に際して、参議院事務局の山口一夫庶務部長、同広報課（南川洋一郎課長、秋谷薫司課長、吉岡成子広報主幹、猿谷勝則参事、田岡彦了広報企画係長、森下伊三夫広報企画係長）、ならびに衆議院事務局庶務部宮繕課（鈴木英敏課長補佐、高橋三郎建築技術係長）、また参議院衛視班長中島和夫参事、衆議院事務局加藤茂樹参事をはじめとする衆参両院の警務部の方々には、手続きから視察調査の現地案内・立ち会いに至るまで終始お世話いただいた。徳島県東京事務所（長町哲治係長、喜馬和人係長）には、国会議事堂の石材視察調査に際して、参議院広報課への連絡・日程調整でお世話頂いた。衆議院憲政記念館（高橋朝明氏、福本 真氏）には、同館所蔵の国会議事堂石材見本について教示頂いた。

矢橋大理石株式会社（岐阜県大垣市赤坂町、業務部 安田良朗次長、戸川雅弘係長）には、同社所蔵の徳島県産大理石見本をはじめ、関連資料について教示頂いた（2004年3月23日）。

とくに同社顧問で、1932年入社以来、国会議事堂の大理石石材資料に関与された折戸嗣夫氏（岐阜県大垣市青木町）、ならびに、1952・53年にわたって、国会議事堂関連石材の採掘場跡を調査した長谷川 進氏（岐阜県大垣市北方町）には、国会議事堂石材写真や石材試料の照合に立ち会って頂き、関連資料について教示いただいた。

旧木沢村（現那賀町）教育委員会当時の井内海俊教育長ならびに、仁義博文氏（木沢山の会、木沢村向エ）、松本四郎氏（旧木沢村木頭広瀬）・山本重行氏（旧木沢村坂州）をはじめ旧木沢村

のみなさまには、「曙」・「木頭石」に関する情報収集に協力頂いた。旧木沢村誌編纂室（井上茂夫室長）には、「曙」採掘当時の聞き取り情報について、ご教示頂いた。「曙」を1927～1930（昭和2～5）年頃に採掘した神原博氏（阿南市阿瀬比町中村）には、採掘当時の状況を口述頂き、関連資料を見せて頂いた。「四紋」は、同氏の口述（2004年2月1日）による。（有）吉崎建材店（阿南市見能林町堤ノ内）の吉崎義人取締役社長、豊田隆専務取締役、ならびに吉崎孝彦氏（阿南市富岡町東仲町）には、「曙」の搬出と吉崎善八氏に関する資料・情報を提供頂いた。

（有）田中工業所の田中一成代表取締役（阿南市桑野町鳥居前）には、「曙」に関する聞き取り調査に協力頂き、「時鳥」の採掘現場、ならびに田中鉦山と田中賀平・田中竹次両氏に関する情報をいただいた。田中滋子氏（阿南市阿瀬比町西内）には、所蔵の田中賀平氏関連資料を見せて頂いた。株式会社ヒロックス太龍鉦山事務所（阿南市加茂町黒河）の加藤清尋所長には、田中鉦山関連の石材採掘場跡に案内頂いた。

徳島県文化財課の福家清司課長（現文化庁主任文化財調査官）には、調査の便宜を図っていただき、「加茂更紗」採掘跡の視察に同行いただいた。早淵隆人氏（徳島県文化財課）、ならびに松浦康雄氏（阿南市桑野町大地）には、「加茂更紗」を採掘した松浦菊蔵氏についてご教示頂き、松浦家所蔵の関連資料を見せて頂いた。阿南市史編さん室（古川良夫室長）には、収集された国会議事堂石材関連資料について教示頂いた。

高島光彦氏（阿南市津乃峰町東分）には、「答島」の採掘場跡に案内頂き、高島兵吉氏に関する資料を見せて頂いた。増田肇氏（阿南市津乃峰町中分）には、「答島」採掘当時の状況についてご教示頂いた。徳島県阿南土木事務所（板東英明次長）には、阿南市宝田町井関の採掘関係者についての情報を提供頂いた。

徳島石材産業株式会社（徳島県板野郡板野町）の柴田圭一営業部長には、石材見本の作成に協力いただいた。多摩美術大学造形表現学部デザイン学科の石田桜嬢には、国会議事堂の視察調査ならびに、写真撮影に協力頂いた。

文献・資料

- 阿南市史編纂委員会（編），2001，阿南市史 第三卷（近代編）．阿南市教育委員会，1-577．
- 長谷川進，1986（MS），石材（本邦産）．矢橋大理石（株）社内資料，133p．
- 市川浩一郎・石井健一・中川衷三・須鎗和巳・山下昇，1956，黒瀬川構造帯（四国秩父累帯の研究III）．地質雑，**62**，82-103．
- 石田啓祐，1977，徳島県坂州南西におけるシル系石灰岩の発見．地質雑，**83**，437-438．
- 石田啓祐，1985，徳島県地域の秩父累帯南帯における堆積岩類の放散虫・コノドントによる年代とその配列．徳島大学教養部紀要，**18**，27-81．
- 石田啓祐・香西武，2003，四国東部秩父累帯の地帯区分と層序．徳島大学総合科学部自然科学研究，**16**，11-41．
- 石田啓祐・吉岡美穂・岡本治香・難波亜里子・中尾賢一・香西武，2004，徳島県産国会議事堂大理石の研究 - その1. 産地と地質概要 - ．徳島大学総合科学部自然科学研究，**18**，15-23．
- 木沢村誌編纂委員会（編），2005，「曙」の切り出し．38，木沢村誌後編，徳島県那賀郡木沢村，745p．
- 小山一郎，1931，日本産石材精義．龍吟社，東京，298p．
- 工藤晃・大森昌衛・牛来正夫・中井均，1999，新版議事堂の石，新日本出版社，東京，158p．
- 中川衷三・岩崎正夫・須鎗和巳・石田啓祐，1979，5万分の1「阿波富岡」表層地質図および説明書，徳島県，土地分類基本調査，38p．
- 中川衷三・岩崎正夫・須鎗和巳・石田啓祐，1980，5万分の1「桜谷」表層地質図および説明書，徳島県，土地分類基本調査，32p．
- 中尾賢一・高島芳弘・長谷川賢二・魚住純一，2004，石とくらし．徳島県立博物館企画展「石とくらし」展示図録．徳島県立博物館，31p．
- 大蔵省営繕管財局，1936，帝国議会議事堂建築の概要，東京，57p．
- 大蔵省営繕管財局，1938，帝国議会議事堂報告書．東京，p.411．
- 四国通商産業局（編），1957，四国鉦山誌．（財）四国商工協会，816p．
- 徳島県教育委員会（編），徳島の文化財．徳島県，382p．